人権さんだ

4月号
令和4年(2022)
No.517

「ふつう」って？

《問い合わせ》
共生社会部福祉共生室人権共生推進課
TEL：559-5148　FAX：563-7776
E-mail：jinken_u@city.sanda.lg.jp

※写真は合成

「ふつう」って、何でしょうか？

上の写真は、トイレに表示されている男女の性別を表すマークです。このような姿は男女の平均的な体型からデザイン化されたと言われています。

もしこのマークが違う色で表示されていたり、女性用トイレのマークの人物がズボンをはいていたら、多くの人は「これはふつうのトイレなの？」と混乱してしまうかも知れません。このことは私たちが無意識のうちに「ふつうか、ふつうでないか」を区別しているからではないでしょうか。

今号では身のまわりにある「ふつう」について考えてみましょう。

女性用トイレのマークの人物がズボンをはいている表示

UD FONT
見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。

わたしの「ふつう」はみんなと一緒じゃないかも

柳家 花緑さん
© 馬場道浩

落語家の柳家花緑さんは、幼いころから文字を読むのが苦手だったようです。学校で、本を音読するのが大嫌いで、勉強もできなかったと言われています。そういう意味では、他の子どもが「ふつう」にできた読み書きができない子どもだったのかも知れません。（後に読み書きが極端に苦手な識字障害であることがわかったそうです。）

その花緑さんが落語家になりたいと思って、弟子入りして落語の世界に飛び込みました。落語の稽古というのは、師匠の芸をそばで聞いて、そのまま真似て覚えていく作業が多く、文字を読むことはあまりなかったそうです。花緑さんは落語家としてどんどん実力をつけて、今では楽しく落語を演じられているそうです。

インターネットでNHK for Schoolを検索すると、「発達障害のある人たちの座談会」という動画があります。そこでは、会話（話し言葉の理解や表現）は普通にでき、知的にも標準域にありながら、読み書き（文字情報の処理）がうまくいかない状態の若者の声を聞くことができます。

その動画の中で、Aさんは自身が学校で体験したことを紹介した後で、次のように語っています。

「先生たちは、自分が得意な教科を教えている。先生自身が苦手な教科を教えるのがよい。〝なんでできないの？〟って言葉は自分ができるから出る。もし自分が苦手なことでそうなったら、その言葉もでないだろうし、新しい考え方も出る。（と思う）」

また同じ動画でBさんは、「人の目を見て話せ」という「ふつう」のことに対してこう言います。

「僕はちょっと耳と目の情報が違いまして、人の話に集中したいからこそ、目線を別のところにやる。目の情報を少なくして耳から入る情報に集中したいんです。その人の話をちゃんと聞いて理解したいために目線が合わせられないんです。」

Bさんによると、実際の社会ではそれが理解してもらえないことが多く、仕事をする上で悩んでおられるようです。自分の周りにBさんのような人がおられたら、じっくりと話を聞いてみたいですね。

多様性社会

「ふつう」って、一体何でしょうか？最近、よく耳にする「多様性」という言葉をキーワードにして考えてみます。

私たちの日常生活で「多様性」について考える時、例えばLGBTや外国人、障害のある人など、マイノリティの人たちに関する話題が多くなってきましたが、多くの人と異なる特徴や特性について社会が正しく理解していないことがあります。苦しい思いをしてきた人たちがいることを知り、違いを認め合い共に生きていく社会の実現が求められています。

先に紹介した柳家花緑さんやAさん、Bさんのように、様々な特性のある人たちが、自身の悩みや苦労を抱え込むことのない多様性を認め合う社会にしなければなりません。

お互いを尊重しあう関係

2016年から2018年にかけて出版されたコミック本「しまなみ誰そ彼」は、ゲイやレズビアン、トランスジェンダーなど、様々な性的マイノリティの人たちが、お互いの心を尊重しあいながら社会生活を送る物語です。どの登場人物も周りの人にどう理解してもらうのかをいつも考えています。周りの人がどう思うか、自分を受け入れてくれるのかと思い悩んでいます。その気持ちの重さの正体は一体何でしょうか？

私たちの社会では自分たち（大多数の人たち）の考え方を正当化するために、「ふつう」とか「当たり前」ということを重視して、少数意見を持った人に対して、自分たちの意見に合わせるよう誘導したり強制したりすること（同調圧力）があります。ストレス社会

と言われる現代は、この同調圧力が強い社会になっていると言われています。

誰もが住みやすい社会となるには、多様な生き方をしている人が身近にいることを知り、同調圧力を生み出さず、お互いを尊重し合う関係が必要ではないでしょうか。そのためには、相手を理解しようとする気持ちや相手の立場に立って考える想像力が重要になってきます。

＜参考資料＞　NHK　for School

人権を尊重し多様性を認め合う共生社会を目指す条例

三田市は、いかなる時においても、互いの人権を尊重し、多様性を認め合い共に支え合うことにより、全ての人が自分らしく生きることができる社会の実現に向けて、この条例（略称「人権共生条例」）を4月1日から施行します。

誰もが人権侵害を受けない社会、全ての人を社会的孤立や排除から守り支え合う社会を目指して取り組みます。

4月から、くらしの中の人権に関する悩み・生きづらさ・心配ごとなどを気軽に相談できるよう「くらしの人権相談」として窓口を充実します。

編集後記

これまでみてきたように、私たちが「ふつう」と考えている中に、無意識のうちに約束事のように定められた「尺度」のようなものがあるのではないでしょうか。その「尺度」に合わないからといって「ふつうではない」として決めつける事は差別につながります。

近年、学校の制服の見直しが進んでいます。ズボンやスカートなどを男女関係なく、自分が着用したいと思う方を選べるようになっているところがあります。

「ふつうって何？」という気持ちを持って、自分自身の心の窓を少し拡げて生活してみましょう。

人権コラム

外国でテロ事件や紛争が起きた時、またある地域で感染症や自然災害が発生した場合などに、様々なデマやうわさが飛び交うことがあります。その中で、○○人は怖いとか、○○地方に近づくなといった言葉で、心が傷つけられる人たちがいます。

○○人とか、○○地方というように、物事を「ひとくくり」にして決めつけるところから人権侵害が起こります。「ひとくくり」にするのではなくて一人一人が大切にされる社会でありたいものです。

令和３年度 人権標語・ポスター受賞作品

けやき台小学校 6年（前年度）
田中　清愛 さん

一人じゃない
一緒に気づき
寄り添う社会

すずかけ台地域部会
金子 たみ枝 さん

くらしの人権相談

TEL 559-5062　FAX 559-5063
月曜～金曜　9時～17時（※祝日・年末年始を除く）

専門相談員による性的マイノリティ特設電話相談（予約）

TEL 559-5062　FAX 559-5063
月曜～金曜　9時～17時（※祝日・年末年始を除く）
※専門相談員との相談日は予約後に調整

人権擁護委員による定例人権相談（予約）

TEL 559-5148　FAX 563-7776
《次回相談日》4月28日（木）13時～16時

わたし No.178 出会う 気づく つながる

つながりを大切にして

三田市立高平小学校 PTA
福井 桂子さん

母としての顔

人はいろんな「顔」を持っています。その「顔」は立場や環境で変わると思います。変わらない人もいるかと思いますが、少なくとも私は変えていると思います。妻として、母として、友だちとして、子どもとして、また、職場や置かれる状況で違った「顔」を持っています。

私自身が一番嫌いなのは、母としての顔です。ほとんどの時間イライラしている気がしています。たぶん思い通りにならないことばかりだからです。頭では、「まだ子どもだから」「子どもには子どもの考えがある」「子どもも疲れている」「何より頑張っている」と、分かっているつもりですが、いざ毎日の生活となると、自分の思い通りにならないことで怒ってばかりです。『転ばぬ先の杖』の思いから「こうしとかなくちゃ後で困る」「後で苦労するのは子どもだから」などと、いろいろ考え、求めすぎているのかもしれません。そして上手くいかないと「一体どうなるんだろう?」「これで大丈夫なの?」と、不安を募らせています。そんな心配は子どもには伝わっていないので、「お母さんは思い通りに動いてはくれないし、分かってくれない」と感じているのでしょう。毎日同じ繰り返しで、先の見えない迷路にいる気がしています。

子育てをするまでは、自分がこんなにイライラしたり、人に感情をぶつけたりするようになるとは思いませんでした。しかし、人を育てるということは一筋縄ではいかず、何が正解かも分からず、いつも不安と隣り合わせで、日々悩みながら過ごしています。

学校で先生から聞く子どもの様子は家とは全く違い、言うことを聞き、言われたことを守り、学校社会では上手くやっているのです。ただ、学校では出さない「顔」の部分が気になって仕方ありません。

子どもの姿からその人の持つ「顔」は、人に言われて変わるものではないことに気づきました。自分がそうであるように、自分が変われないのに子どもに変われという方が無理なのでしょう。少しずつでも私自身が変われるように努力したいと思います。

地域社会での顔

子どもを持つ親として、住んでいる地域社会とつながりを持つことが当たり前となり、日々の子どもの学校生活の中での出来事や授業参観、研修や講演会などで人権や差別について学ぶ機会があります。また、PTA同和教育推進委員会に縁があり、活動に参加しました。子どもに伝えるには、まず自分が正しい知識を得ることが大切であることに気づきました。これまでの私は、何となく知り得た知識で生活していたこと、知らないことで人を傷つけてしまったり、気づかずに助長してしまったりしたこともあったのではないかと、ふり返ることもできました。何気なく生活していると、気になっていても深く掘り下げないことや、知らず知らずのうちに目を背けていることもあります。しかしそれでは差別はなくならないし、〝差別する心〟はなくならないと思います。私は差別を見抜く力を養うことが必要だと研修会や講演会などで学びました。PTA同和教育推進委員会は、私にとってそのことに気づかせてくれた場であり、正しい知識を得る機会を与えてくれました。

出会いとつながり

子どもは、学校という社会の中で人間関係や社会性を学びます。何が正しいのか今はわかりませんが、出会う人とのつながりを大切にしてもらいたいです。子どもの成長とともに、私も親として、人として成長できるよう学べるこの環境に感謝し、これからも大切にしていきます。

令和３年度
ラブピース４コマまんが受賞作品

「言葉の花びら」

三田小学校６年（前年度）
川岸 心桜 さん